

以三凝留不斷。至於殄敗。斯亦運之極乎」

○うんのつき

運盡也。文選、豪士賦序、陸士衡

「是以事窮運盡。必於顛仆」

文選運命論、李蕭遠註、李善曰「運

大木を谷におとす」（猶「え」を參照せよ）

○えいぐわ 築華也。前漢書廿六劉向傳「帝堯成

王能賢舜禹周公而消其工管蔡。故以大治築華至今謂之五德更運。帝王所稟以生也。春秋命苞曰「五德之運。各象其類。興亡之名應錄。以次相代」宋均曰「運錄運也。春秋之命苞曰「命者天下之令也」

えーノ部

○え　え　えい　今東國の俗、よき人と云べきを、えゝ人といひ、よき心持と云ことを、えい心持と云り。古事記上「愛袁登古」「愛袁登賣」とあるを、書紀には「可美」とも「可愛」とも善とも書れたる。又神武天皇大御歌に「延袁斯麻賀牟」とよみ給へるに、延は可愛也。又天智紀重謠に、吉野を延斯奴とあるに合すれば、猶古言也。又打とけたる應答にも、此言どもを以てこなふ。是は安通音なり。

○えいせん　永錢也。北條九代記二「永樂は明朝の代、丹六年にて、日本は應永十癸未の年に當る。此年八月三日、唐船我朝へ来る。此船どもに、かの永樂錢をつみ來りけるが、慶長十一丙午年までは、二百九年になりぬ。古老語傳へて云やう、近き年まで關東にびた永樂取まじへ、同じ直に遣ひしが、在々所々に於て善惡を争ひことわり止事なし。其比關東八ヶ國の守護北條氏康云仰せけるは、錢品々有といへども、永樂に増はあらじ。自今以後關東にて永樂一錢を遣ふべしと。天文十九戌年、高札を立らなければ、關八州の市にて永樂を用る。此儀近國他

トテ出合シズ」沙石集に「袖どもえいぐと云て、

大木を谷におとす」（猶「え」を參照せよ）

○えいぐわ 築華也。前漢書廿六劉向傳「帝堯成王能賢舜禹周公而消其工管蔡。故以大治築華至今文選、寡婦賦潘安仁「築華耀其始茂兮。良人忽以指背」注、李善曰「丁儀妻寡婦賦曰云云。楚辭曰、及築華之未落。王逸曰、築華喻顏色也。莊子一齊物論「道隱於小成、言隱於築華。」離騷「及築華之未落兮。相下女之可貽」

國へ聞え、びたの内より永樂をえり出し用る故、び

たはいつとなく上方へ上り、關西にて遣ひ、永樂は關東にとまりて用る。然るに今は天下一統の世となり、東西南北にて此二錢をつかふ。されども永樂

一錢の代りに、びた四錢五錢つかふ。是によりて善惡をえらび、万民安からず。此よし公方に聞えて、

びた二錢を用ふべし。永樂禁制と、慶長十一年極月八日、武州江戸日本橋に高札たつ。それより天下永樂する。故に永樂をはかりめにかけ、鑄物師買取

て、万の道具につかふ。されば此永樂世のびたならびならば、末代日本の寶と成べきに、天文より余錢

に秀で用る事、たとへば燈消んとして、其光を増が如し。慶長五十七年をさかりにして、めでたき寶

錢も、めつする時節にあへる事の不思議さよ、とかたりける」房總志料三「里見氏九世、永樂錢にて采地

の割ありしに、永樂錢一貫文は十石に充と」續草庵

雜談に「知行を貫をもて稱する事、諸書に考れども

知がたかりしに、今仙臺の人、万石以下をば貫を以て稱す。拾貫を百石とす。これにてよく知れたり」などあり。猶錢の事は勢部にあまた出せるを見て知

べし。

○えいよう 禁耀也。白氏文集世三「老來生計律

人間榮耀因縁淺。林下幽間氣味深」

○えいよう 是は歎息なり。古事記、神武段に「疊

〔引〕志夜胡志夜。此者伊基能布曾云云」傳注云「疊は

盈誤にて、盈々ならん。此言は今俗に醜惡き事、或は汗穢き事などを見聞て、延々といふ。是惡み疎む歎息の聲なり。此も其に同くて、兄宇迦斯がおふけなく逆なる所爲を辱しめ惡みたる辭也。音引とは、二

つ疊を離しては讀ず、只一の疊を長呼が如く引てよ

めとの注也」といへるが如し。但疊字、古き假字に例なし。字形も又遠し。おもふに、疊は愛を寫しあやまりたるならん。此は訓なれども音の隔を以て、

此二字は訓を用ひたる也。そは疊も草書に古く毫と書。又愛の草書も毫とかきて、其體甚ちかゝれば也。

（猶「えいを参照せよ）

○えきれい 瘟癆也。古くは役病といへり。役

は其字音には非ず。人毎に病が、役に差されて立に似たる故なるべしと、記傳に云る如し。さてかゝる流行病は、多く外國の汚穢に觸て病と云こと、たが

ふべからず。欽明紀に「國行疫氣民致天孽。久而愈多不能治療」とある時も、異國人の來りし年也。又敏達紀に「此時國行疫疾民死者衆」とあるも異國人の參集し翌年の事也。然れば崇神紀五年の役病は、今云疫病にはあらず。たゞ人毎に病たる故に、役病と傳へたるにて、疫病の始は、欽明朝に異國より率て來つるにこそ。三代實錄「貞觀十四年春正月。京邑咳逆。疫病發。死亡者衆。人間言渤海客來。異土毒氣之令然焉」とあるが如し。猶此後々も、年代記に記す所を以て推に、一度も異土の毒に無不觸（然らば長崎に住人はいかにとも云べけれども、此は本神の嫌はせ給ひて然るなれば、彼津まで來て交易するのみは其うれひもあらざるにこそ。猶其弁も色あれども、こには得しるさず）たゞ流行の風邪の上にも、近年唐人風、琉球風などいひて、あまた病たる、誰も皆よく知所なり。さてかの疫病の一たび此國に留りては、時々鬼物其魔に觸て、民を害ふ事のあるなるべし。外國のさたにはあれど、後漢書五十五盧植傳「禦疫者、宋后家屬。並以無辜。委骸橫尸。不得收葬。疫病之來。皆由於此。宜敕收

拾。以安遊魂」と。此說はたがはざる事とも也。此天保年間の飢饉中にも、餓死せし者多かりければ、疫病も又隨て多かりしが如し。又皇神を尊ぶ家、又威あり徳ある人の家には、入來らざるも此故也。

○えこ 依怙也。大乘理六波羅密多經一「依怙」希麟音義「上於希反。玉篇云。倚也。切韻云。從

也。論語云。依於仁也。說文。從二人相依倚。會意字也。下胡古反。爾雅云。怙恃也。韓詩外傳云。怙賴也。毛詩云。無父何怙。從心古聲也」

○えせ某 枕冊子段「むかしはえせものも皆すきをかしうこそありけれ」又段「おひさきなくまめやかに、えせさいはひなど見てゐたらん人は云々」又「えせをと」「えせおや」とも云り。又無名抄下「えせうた」又「えせうたよみ」四季物語四「えせたる虫」又「えせ受領」などいへり。今世にも國によりてはえせ某といへる事あり。

○えぞ 蝦夷也。えぞは延毘湊の略轉也。武藏國崎玉郡の加湊を、口語には加曾といへり。さて其延毘湊を、古語に延美斯といへり。毘と美と互に相通ふ例多し。言の本は蝦夷の約れる也。そは爲人毛

鬚の多く長く生たる貌、蝦に似たるを以てなり。但し古くは倭八十梶師、土雲等を始め、國々の土雲を云名なりしが、終には蝦夷嶋人の名とはなる也。何れの國にても穴居するものは、身の置所獸に近き故に、おのづから毛毬の多く長く生るより、此名をおひしなるべし。

○えたりやおう　　今昔廿七^{三十}_{五丁}に「ヒタト抱付テ、音ヲ高ク舉テ得タリヤオウト云テ、脇ト思シキ所ヲ刀ノ櫛口マデ突立ツ」

○えはう　　吉方也。中宮御產部類記に、同委記を引たるに「令著御帶給事。及五箇月擇吉日」

令著給。先例無勘文。但當日召陰陽師被問吉方時也。親昵人之中。擇無其憚召御帶。當日練調之長一丈六尺許。以宮司遣御衣笥。即持參本宮御覽之後。爲加持遣僧許。宮司爲御使。衣冠先例不召其人。唯遣本房也。尅限持參之後。於^ノ晝御座向吉方令著御之云々と見ゆ。吉方參の事は下に出すべし。

○えびす三郎　　盛衰記九「硫黃嶋ニハ渡ケル中畠嶋ノ者共申ケルハ、此御棲ヨリ五十余町ヲ去テ、一

ノ離山アリ。峯高ク谷深シ。其名ヲ鸞岳ト云。彼岳ニハ夷三郎殿ト申神ヲ奉祝、岩殿ト名付タリ」東鑑四十三^{三十四}鶴岳上下宮爲正殿遷宮也。今度始而於西門脇所被勸請三郎大明神也。又同四十四八「夷社」には常見えたれど、うたによみたるが珍しき故に引つ。

○えびぞめ　　夫木六春、源仲正「たれかすむ山下水のかきつばたむべえびぞめのいろに喰けり」文には常見えたれど、うたによみたるが珍しき故に引つ。

○えはうまゐり　　明月記「寛喜三年正月九日午時許、乗車行賢寂之宅、依生氣方今年初書、行見孫子之小女婦云々」

○えばしおや　　えばし　　鳥帽子親也。元服親とも書て、其意也。異本曾我物語云「俣野とるべき相手なき間、すでにいたらんとする所に、助道こちらへかね、または鳥帽子親の實平が、俣野が詞にけなされて、本意なげに見えければ、すゝみ出て申すやう云々」同上「北條が事は、助長がためにも元服親にて候へば、某も書を以て申べく候とて、御前を立にけり云々。則義時が元服子として、後は江馬小次郎といひしは是也」北條九代記六「義村申されけ

北條九代記六「義村申されけるやう、故義時の御と
きに、義村しばく忠勤を抽て、御懇意を表せられ
四郎殿御元服の時、義村を鳥帽子親に、恩息泰村を
御猶子になさる」源平盛衰記、鷲尾三郎一谷案内之
條「汝を鷲尾三郎と云べし。名乗は我片名に父が片
名をとりて、經春と附べし。片岡と同名なれども、
多き人なれば事かけじ。只今鳥帽子親の引出物にと
て、花憐木の管に白金の筒金入たる刀に、鹿毛の馬
に鞍置て、赤革威の甲冑に小具足付てたまふ」とあ
る、是らを合せ見れば、もと元服の時鳥帽子を着す
るより出たる稱なるべし。さてそれより今世に云名
附親の類迄にわたしていひしにこそ。

○えむむすび 縁結也。縁はゆかりの意なれど
も、常に因縁、宿縁、遠縁などいひ習ひて、つひに
音語の弘れる也。むすびは天地萬物を產出賜へる大
神を、高皇靈尊、神皇產靈尊と稱、又魂を結び賜へ
る神を、魂留産日、生產日、足產日と稱し、また其
他にも火產靈、和久產巢日、角凝魂など申す、牟須
毘の意皆同じ。拾遺集の歌に「君みればむすぶの神

ぞうらめしきつれなき人をなにつくりけん」狹衣物
語に「いとかくしもつくりおさきこえさせりんむす
ぶの神さへうらめしければ云々」

○えもん 繼世繼花のあるじ「この大將らの花園左大臣有仁ことのほかにえもんをぞこのみ給ひて、上のきぬなどのながさみじかさなどのほど、こまかにした、

め給ひてぞ、その道にすぐれ玉へりける。大かた昔は
かやうの事もしらでさしぬきもながうふみて、ゑば
しもこはくねる事もなかりけるなるべし、此ごろこ
そさびゑばし、さらめきゑばしなど、をりくかはり
て侍るめれ。白河の院は御裝束まるる人など、おの
づからひきづくろひなどしまゐらせければ、さいな
み給ひけるとき、侍りし。いかにかはりたる世にか
あらん。鳥羽院、この花園のおとゝ、大かた御みめ
とりくにすがたもえもいはずおはしますうへに、
こまかにさたせさせて、世のさがになりて、かたあ
て、こしめて、名ぼしとゝめ、かぶりとゝめなどせ
ぬ人なし」

○えらい えらいめにあふ、えらい奴ぢやなど
云えらいは、本古語のいらなくと云言より出たるか。

そは既に伊部苛の條に出しつる「伊良那禪久古事記明宮殿歌、万葉十七廿六丁云云」と云は、木芒の束と同じく、物のいら／＼と身を刺が如く、心にしみておぼゆるの語なるを、事の切なる方より、甚大の意に轉用せしにやあらん。彼からうじてと云ことを、土佐日記に「からく神佛を祈る」と用ひて、甚しき方に云たると同例なれば也。猶其用ひさまをおもふに、

空穂、藤原君二十に「天の下のいらなき軍士なりとも、うちかちなんや」宇治拾遺に「いらなき大刀をみがき云云」又同「むしり綿をきたるやうにいらなくしきが云云」大鏡に「此史ふんばさみに文はさみて、いらなくふるまひて、此おとゞに奉る」徒然草に「數珠おしすり印こと／＼結びいでなどして、いらなくふるまひて」など云る、皆甚大の意と聞ゆ。さらば今云えらいはいらきの音便（源氏橋姫又手習等の卷々には、いらき共いらきともいへり）いらなくは苛痛にて、はしたをはしたなくとも云が如く強くいはんとて痛を添たるなれば、あるもなきも同じこと也（かゝるなくは無の意にあらざる事、鐘の響はしななく條に委く云り。）

○えんざ　　和名鈔「圓座。一云和良布太。圓草
襢也」圓座はまろくへりありて、しとねのやうなる物と、雅亮抄、大鑒雜事記などにみゆ。

○えんめいそくさい　　空穂春日詣に「えんめいそくさいをむねとして」

おノ部

○御案じ被下間敷　「あんす」を見よ。

○おい／＼　「おい／＼となく」「おい／＼とよぶ」など云「おい／＼なり」應答にもおい／＼と云ことあり。讃岐日記上「おい／＼とくどきたて／＼ながるゝ涙をおとす」今昔卅九「夷母オイ／＼ト叫ベド、男答ヘモ爲ズシテ云云」讃岐日記にも猶あり落葉、枕冊子、築花月宴六十「いかでいひとつは申給ふぞ、それはた、かたじけなき人をときこえたまふ。おい／＼さなり／＼とのたまふ」とある、是はいらへなり。

○おいしい　　美味也。今なべて女の詞に美味をおいしいと云是也。二水記、正月淵醉記末云「大臣之外取酌之人無之歟。已次之大臣只盃許歟云云」御湯殿記、永祿五年五月十六日條云「けふは御きたう

どもあり。女中の御ながえ御さかづきまわりて、皆
々御いし」と御いはひあり」空穂吹上中「いしき
さかづきなどいとめづらしく云々」永正五年正月二
日、狂歌合判詞云「花びらもちのいしげなる云々」
とある、是ら皆口にうまきをいへり。盛衰記、十七
に云「歌ノ音ノヨサヨイシイシト嘆ラレタリ」とあ
るは是は「うまし小汀」「うまこりのあや」などいふ
類にて、美味より移して、聲のうまきを云る也。猶
神代紀に「國稚、地稚」宇治拾遺に「いしくもいひ
けるかな」又盛衰記十七に「イシクモウタヘルモノ
カナ」などあるも、皆本同言ながら、時によりて用
ひざまのかはるのみなり。

○おいでなさる 「ござる」を見よ。

○おい花がさく 年老て後幸ひある人を、老花
がさくといふ。万葉十六三十に「者矣奴吾身一爾七重
花佐久八重花生跡白賞尼白賞尼云云」

○おけばれ 勅額政集「いづこそや妹が玉づさか
くしおきておほえぬほどに老ぼれにけり」

○おいへやう 勅額 辰筆額 御家様也。

蹇驥嘶餘云「世尊寺清水谷ハ能晝ノ家也。是ヲ家様

ト云也。舊院様ヨリ後圓融院家様ヲアソバシ、改テ勅
筆ガクライカニモ風流ニアソバシ出シ、諸家ニ學之
トアリ。勅筆ト云ハ辰筆ト云フト見エタリ。後世コ
レラニヨリテ勅額ト辰筆ノ額ト、同事ノヤウニナリ
タレモ、差別アルベキト也」名物六帖、通鑑「周紀
世宗勅天下寺院「非勅額者悉廢」之」註胡三省曰
「勅額者賜ニ寺額如慈恩安國興唐之類。按勅許建
寺則賜額。謂之勅額非ニ辰筆扁額也」

○おかす 犯也。荒木田氏、信濃漫錄に「犯乎
加須假字也」とて、いろくといはれたれども、慥
かならず。後撰集秋中「秋の野のつゆにおかる」を
みなへしは「らふ人なみぬれつゝやふる」又「白露の
おかまくをしき秋萩を手折らばさらに我やかざ
ん」これ露の置に犯すを兼たれば、猶於加須の假
字とすべき也。

○おかは 右同じ器をおかはと云も、御廁にて
廁より出たる名なり。其廁はもと川へ架作りて、流
すしてしよりいふ也。加部に出。(猶「かはや」を參照
せよ。)

○おかげ 「おたふく」を見よ。

○おき 燐也。寛平御時、后宮歌合に「人をおもふ心の、おきは身をそやくけよりたつとは見えぬものから」古今集物名、**おき火**、都良香「ながれ出るかたゞに見えぬなみだがはおきひん時やそこはしられん」空穂、藏開十「おきのうへにゐる心ちして、いやますくにおぼさるゝに、御まへの一もとさく、いとたかくいかめしくうへろひて」和名抄「熾比猛火也。又盛也」

○おきあがる 空穂、藏開十「おきのうへにゐる心ちして、いやますくにおぼさるゝに、御まへの一もとさく、いとたかくいかめしくうへろひて」和名抄「熾比猛火也。又盛也」

○おきあがる 六百番歌合、有家卿「朝まだき庭もまがきも野分して、おきあがる草のはもなし」

○おきうしなふ 順政集「こひくてまれにうけひく玉章をおきうしなひて又なげくかな」

○おきがほ 朝の起也。夫木十一秋、藤原道經「をみなへし露のおきがほ見せじとやすそのゝきりの立かくすらん」

○おきこむる 夫木十四秋、中宮權大夫家房卿「秋の野のちくさのいづかれあへぬに露おきこむるよはの初霜」

○おきぶみ 難太平記上に「義家ノ御置文ニ云。

我七代ノ孫ニ我生受テ、天下ヲ取ベシ」とある、これは未來記の事なれども、今云所も其さしおく所の意は同じき也。

○おくがき 奥書也。十六夜日記に「さうしながらへば、おくがきと云べきものなり。

○おくにかぶき 順聚名物考云「物真似狂言記云、百七世正親町院御宇。永祿二年末に京都將軍家

足利義輝公室町殿において、酒宴の興に狂言盡しの催しあり。卽管領の嫡男よりはじめ、近習、小性、局の輩、其外抱へのものどもを集て、物真似狂言有。その番組室町殿目録に載たり。歌舞妓女五人有し中に、お國といへるは殊にその才藝すぐれたるもの故に、度々舞せられしに、名古屋山左衛門と密通の科によりて、共に追出されて、忍びて有しが、後に又織田信長公の比により出されて、狂言などとめし也」とあり。是はお國歌舞妓の濫觴にて、これが跡を繼たる妓女も又お國といひて、名高くなりしよし也。

○おくみ をくみ 今衣の前襟をおくみと云

は、小矜に對へて、大襟を省き云也。字鏡に「穢衿也、古呂母乃久比」また「衿領衣上縁也。己呂毛乃久比乃毛止保志」和名抄に「釋名云、衿領也。所以擁頸也、音領、古呂毛乃久比」また「粧四聲字苑云、粧和名於保久比。衣前襟也」

○おくりつくる。賴政集「よもすがらさえ行月を山の端におくりつくるはこゝろなりけり」

○おくりな 「いみな」を見よ。

○おごく 陸奥國の人は、勤くをおごくといへり。雅言にも云こと也。源重之集に「またこせしの君、あし高蝶の手ひとつ落たるが、二三日ありて猶おごくを「さゝがにのくものはたでのおごくかな風をあはれとおもふなるべし」

○おこし 菓子の名におこしと云あり。著聞集

十八云、「法性寺殿元三に、皇嘉門院へまゐらせ給ひけるに、おこしごめをとらせ賜ひてまるよしして御口のほどにあてゝ、にぎりだかせ給ひければ、御上のきぬにはらゝとちりかゝりける云々」又源太府集云「侍從中納言ませくだものつかはすとて「おもふ事なるてふこのみねがふことみつのをりひつこ

れをまゐらす」返し「ことしよりよろづの人をひたひぐりおもてを君ぞおこしごめなる」とありて古へはかくやむ事なき御あたりにきこしめしゝを、今はいやしき菓子となりて、わなかおこしといふやうにぞなりにたる。和名抄に「粧粧。文選注云。粧粧ハ女ノ二音和名於古之古女以蜜和米煎作也」

○おこと 江戸總鹿子、名所大全七云「二月八日事納とて、江戸中町々の家毎に籠を竿にかけて、

高く屋上に建置く事いかなる故とも知がたし云々。殊更今日を事納と云は、彌心得がたし。十二月八日を納として、今日を始といはゞ可ならん云々」江戸鹿子二云「二月八日事初、江戸中に籠をつる也云云」南畠隨筆云「二月八日の事始、十二月八日の事納と云こと解ざるに、詩經に「椒載トウカイ南畠」と云はることは農事也。詩と俗言と合へり云々」といへる、是ら都てわろし。猶今俗のなべて云ごとく、二月八日を事納、十二月八日を事始と昔より云し也。そは諸禮當用集荒木正之撰明和二年刊本卷上曰「十二月十三日事始とて、來年の正月祝儀物どもを買もとむる日也。煤はき家々の吉日あるべし。廿八日に正月の饅餅居る人

此日多し」又卷中に云「正月の祝儀物萬を用意いたす也。昔より十二月十三日を事始といふ事は、十二の數終る故也」といへり云々」滑稽雜談廿三段五十二月十三日事始と云事、延喜式十一四丁太政官式云「凡元日天皇受皇太子及羣臣朝賀弁官預仰詣司弁備庶事事裝束辨史等行事。前月十三日大臣預點殿上侍從四人左右各二人少納言二人奏賀奏陽各一人簡四位已上堪事者爲之奏聞定之儀式云云」和俗正月事始とて臘月十三日より來陽の諸事を祝し營む也。按に、朝廷にも此日元日の庶事を定らるゝよし也。民間にも又准^レ之にや」とある、此等の説ようし。然るに今民間にて八日を用るのは、十二月八日に專煤掃する故に、轉じたるなるべし。いつ比より八日に轉じたるかとおもふに、古今我集と云古き狂歌書に『二月八日人のもとへゆきければ、事納のことぶきありて、まさな事などし侍りければ、廢葉「かずく」に籠の云出たき事納め調度よい時こゝにささらざ』とあり。こは寶永中に書る書なりければ、はやく其以前より轉じたる也。さて籠を捧るわざは、物に買物の済たるしるしなりとも又奥州征伐より發る事なりなどいへど、據なし。右

の狂歌によめる如く、籠の目の多きを縁にて、目出たさを招く兆とせしわざならん歟。又下の鬼威の條に云を合せ考ふべし。

○御ことぶきいくつ 「ことぶき」を見よ。

○おこは 強飯也。今世の女の言に、強飯をおこはと云。大神宮年中行事に「御強」と見ゆ。

○おこり 大神宮年中行事に「御強」と見ゆ。位殿御發心地。今日令^ノ發給云云。園大曆に「春宮大夫瘡病未落居。今日即發日也」とあり。是をわらはやみと云は、童に多き病なる故に云歟。源氏、若紫に「わらはやみをわづらひ給ひて」中務内侍日記に「わらはやみ云々。めでたくおちさせおはしましぬ」大鏡序「わらはやみをしてあたり日に侍りつれば云々」續博物志曰「瘡鬼小也。不能病^ノ巨人。故曰壯子不^レ病^ノ瘡」(猶「やくびやう」を參照せよ。)

○おこり日 「おこり」を見よ。

○おごる 奢也。拾遺集物名、すけみ「いにしへはおごれりしかどわびぬればとねりがきぬも今はきつべし」

○おさへらるゝ 隆信集賀、五位正下「ひさし

くおさへられてあまたの年をおくりてのち云々」是
はさまたげられての意に云る也。

○おし おとし ふむはなら こぶち

古事記中に「押見打而死」神武紀に「踏機而壓死」天武紀に「詔諸國曰、自今以後制諸漁獵者莫

造檻穿及施機槍等之類」和名抄政猶具に「漢語

抄云、鐵弩、一云幽弓。於之」とあり。今世にはおと
しといへり。機の落を以て云にて、壓と同意なり。

國によりては、こぶちともいへり。其形狀壞ち落るが
如くなるより云歟。凡機類にもくさべあれど、い
づれも此處に觸れば、彼處に發き、離るゝ状に爲か
けたる物なれば、ふむはなちといふも其意かなへ
り。

○おしあて 月詣集戀上「その人ともしらで見

はべりける女のもとに、おしあてにつかはしける」

○おしあひ 藤原爲忠朝臣集「あき風にするそ

ヽ荻はおしあひてこそをしたて、露をはらへり

○おしづまり 寢を云。後醍醐天皇日中行事「お

しづまりの程に、殿上の臺盤を、校書殿のかべのも
とによせかけて、たゞよせて、おのづくしあへ

り」

藤原爲忠集「さみだれは山田の

くろをおしながしきしもたひらに眞砂あらべる」

○おしのけらるゝ 万代集雜三「いかだしにあ

ふそま川のみをつくし、おしのけられてすぐるころか

な」

○おしまづき 「つくゑ」を見よ。

○おしやらく 「しやれる」を見よ。

○おしろい 粉也。長明四季物語に「春のきた
るやうにおぼえて云々。空のけしきよべ見しにはか

はりて、はなだの紙におしろいつけたるやうに、
ところへしらう見なされ云々」女郎花物語上「四十
「よくのござさる紙に、おしろいたる云々」などあ
り。和名抄に「粉 和名之路岐毛能」枕草紙同。

○おす 物におさるゝなど云おす也。夫木六、

惠慶法師「ふかみどりはやまの色をおすまでに藤の

むらごは咲みちにけり」

○おぞい 此おぞきを江戸にては、魯鈍のこと、
又愚昧の意にいふを、ぬなかにては、うへは愚かし
く見えて、思ひの外に識量ある人を指て、おぞきと

へり。古語拾遺に「天鉢女命。古語天乃於湊女。其神强悍猛固。故以爲名。今俗強女謂之於湊志。此縁也」とある、是によれば、ゐなかにて云かた古意に叶へり。但源氏、帶木に「例の腹立怨するにかくおぞましくはいみじき契り深くとも、絶て又見じ」又東屋に「物つゝみせず疾りかにおぞき人にて」又浮舟に、浮舟の君の川に身をなげんと思ひよれる事を云る處に「すこしおずかるべき事を思ふるなりけむかし云々」これらは強き方を云なれど、何れもよからぬにのみあれば、然も轉用せしにか。又は右の於須岐と万葉九に、詠浦島子歌に「於曾也是君」とある於曾岐と一つに混じて意の轉じたる歟。今俗言に、於曾伊、於受伊又卑き者は延受伊ともいへる中に、延受伊の用ひさまのみ古へを失はざれば也。

○ おそぐつの繪 古今著聞集に「古き上手どものかきて候。おそぐつの繪などを御覽候へ云々」とある、こは今俗に枕繪といふものゝこと、聞えたり。

○ おそなへ 「そなへもの」を見よ。

○ おそぶる 邊土の人、押ることをおそぶるといへる事あり。八千矛神の御歌に「をとめのなすや板

戸を於曾夫良比ヒタチがたへせれば云々」万葉十四丁二十に「たれぞこの屋の戸於曾夫流」とある、こは押を延て、おそぶるソブルの反ス也といふを、又延ておそぶらひとはいふ也。押振オツヅルと云にはあらず。引をひこづらひといふ類のいひなし也。

○ おそまき 古今集物名、大江千里「のちまきのおくれておふるなへなれどあだにはならぬたのみとぞきく」此のちまきの心也。

○ おそもみぢ 夫木十七、冬「みぞれふるはやまが下のおそもみぢひと村見ゆる冬の夕ぐれ」

○ おたふく おふく おとごせ おかげ女頬のふくらかなる女を云。餅をふくだと云と合せておもへば、頤オトギふくれの義なるべし。和名抄に「頤怡反謂之領和名於止加比」とあり。古き狂詩に「二滿與三平」と作りたるも、兩頬高く、鼻低く、額と頤と平なるを云也。これを省きておふくとも云。故に福の意と思へどしからず。又此おたふくをおかめとも云は、古き瓶に腹の中くばみて、兩頬の張出たるが多かるに見立て云なるべし。今も唐津焼の瓶子にさる形ちしたる有り。又昔はおとごせといへ。是も

頤御前の謂にやあらん。雅筵醉狂集雜、乙御前の繪に「花山にすむ人とも口とちてこの乙文字はといめざらん」

○おち 記落 爲落 落度 漏す意のおち也。神代歌に「伊蘇能佐岐流知受」新年祭祝詞に「島之八十嶋陸事無」万葉一八に「寢夜不落」又二十「川隈之八十阿不落」四十七に「蓋世流衣之針目不落」など、古言には見て不漏の意をおちすといひて、今云とおなじ。

○おちくち 俗に事のはじめてそのきはになるを、某口と云ことあり。拾遺物名「あし引の山の木はのおちくちは色のをしきをあはれなりける」小嶋口號に「とへのひくちになりてはてす」とある今濟口といふに似たり。

○おち おばゝ 篠ち 婆ば をぢ をば 江戸にては祖父母を「おちイさま」「おばアさま」といへど、中國より京の方さしては「おちレさま」「おばレさま」といへば、其方もて舉たる也。今是らの稱を一わたりいはゞ、まづ曾祖父母を「おほはち」「おほおほば」と云は、太祖父母の謂な

り。又祖父母を「おほぢ」「おほば」と云は、大父母の謂なり。今「おぢ」「おば」と下に一言づ、添云は、父母を慥に云也。中古のうたの端詞等に「おぢ」を「おば」とのみあるは、大を省きて云也。又伯叔父母を「をぢ」「をば」と云は、大父母に對へて小父母の謂なり。祖父、祖母と混ふべからず。凡此等の字訓は、和名抄ニ、父母類に出たるを見て知べし。かくて我父母ならねど、他の老人をも爺、婆と云。これも本は上と同例の崇辭より出たる詞也。初言を濁るは、俗語の常ながら、こはもと大父、大母を省る故に、濁りていひならへるなるべし。さて江戸の兒女のはの伯叔ならぬ他人をも「おちさま」「おばさま」と云も、同例のいひさまなれど、是は崇むる言と今も聞ゆるを、「かのぢ」「ば」はむげに卑き者を指て云詞となれり。こは時々の耳くせの然らしむる所なりけり。さて此等のこととは、物の注にもこれかれ出たれば、たゞ一わたりいひて止つ。後段をも相合せて見べし。

○おちつき 是はまらうどの座につきたる時、先づ出す食を云。落付に菓子を出す、もちひを出す

などいふ是也。仁治三年内宮假殿記に「奉遷使祭主從三位神祇權大副大臣中臣隆通。亥刻許參宮云々。御息所經繼神主之宿館。長官沙汰進落付之飯酒」。

○おちつき 旅にて行着たるをおちつきと云。

新六帖、うまや、光俊「東路のうまや／＼のおちつきに人もすさめぬ君がわりなさ」濱松二「君にぐし奉りて、里にぞいそぎおちつきにける」うたゝね「おちつき所のさまを見れば」小嶋口號「中納言のたちいりたる所へ、まづおちつきぬ」更科日記「西山なる所におちつきたれば」

○おちど 「おち」を見よ。

○おちぶる 夫木丹六、俊成「あまさかるひなの長路に日かずへておちぶれぬべき身をいかにせん」

○おちばひろふ

伊勢物語に「女どもほひろはんといひければ「うちわびておちばひろふときかませばわれもたづらにゆかましものを」夫木廿七雜、三條入道左大臣「友すやめひきゐておりぬ山しろのとはたのおもにおちばひろふと」毛詩北山之什大田章云「彼有三遺秉此有三滯穗伊寡婦之利」列子曰「林

類年且百歲底春被袞拾遺穗」白氏文集、観刈麥詩云「復有貧婦人抱子有其傍。右手秉遺穗」左臂懸弊筐」延喜式、第五十雜式云「凡百姓被雇刈稻之日。不得率人拾穗」

○おちやたう 御茶湯也。神に茶を奉る事。日

吉社神道密記爾宜正四位下
大藏卿行丸撰「毎歲卯月未日。二宮八王子

十禪師三宮以淨水煮茶奉調進。非古法」とあり。便に云江次第佛名の時に引茶とあるを、挽茶の事とおもふは誤なり。引茶は茶をひくとよみて、茶を配りあつる事也。行茶とかきて、行茶とよむべき。行訓の假字に引字を用ひたる也。

○おづく おそれてものするさまをおづく。するといふ是也。蜻蛉日記に「いかなるをりにからん、ふみぞある。まゐりこまほしけれどつゝましうてなん。たしかにことあらば、おづくもと云々」小嶋口號「いなみがたうておづくも墨をつけ侍りし」

○おつけ まはり あはせ 汗をおつけと云は、配膳のとき、先づ飯につけて出すより云なるべし。小笠原家書云「汗はじめ飯につけて先出

すべし」とあり。菜を廻りと云も、飯の廻りに置ゆ
名にいひて、同じ心ばへ也。又あはせと云も飯に合
せて用る故に云也。大神宮年中行事に「御廻八種」と
見え、空穂物語に、菜をあはせといへること、こゝ
かしこに見ゆ。

○おつばね 「つば」を見よ。

○おとうと 「あに」を見よ。

○おとうと 「うへさま」を見よ。

○おとごせ 「おたふく」を見よ。

○おどくる 源氏に云、「おどけたる人こそ、
たゞ世のもてなしにしたがひて」とあり。

○おとし 「おし」を見よ。

○おとしだね 落胤也。遊京日記に「そんわう
のひかりたりしみこのおとしだねなり」

○おとしむる 金葉集巻下、俊頼朝臣「あやし
きもうれしかりけりおとしむる其ことのはにかゝ
とおもへば」

○おとす 「おこり」を見よ。

○おと、 弟也。こを常に「おとう」といひて、
おとと云は俗語のやうなるを、伊勢物語下に「あに」

おと、友だちひきみて、なにはのかたにいきけり
とあり。

○おとゞひ 兄弟姉妹を相合せ云。弟あひの意
なるべし。顯宗紀に「弟オホシ僕ナラハ是也」万葉一六丁に

「あられうつあられ松原すみのえの弟オホシ娘メイコと見れど
あかぬかも」今物語に「待賢門院の堀川と、上西門
院の兵衛とおといひなり」

○おとな 幼稚に對へて成人を「おとな」といふ。
袖中抄に引る古物語の歌に「きのくにのなぐさのは
まに貝ひろふあまのめざしの「おとななりせば」空穂、

梅の花笠「かくて女はおとな四十人、うなる廿人
云々。おとなはあを色のがらきぬ、わらは、赤色の
あやのはかまに」又藤原君三十丁に「あやの屏風、しと
ね、うはむしろしきたり。あたらしくおとなはらは
さうぞくしたり云々」こは今武家に「おとな」と云者あ
りて、専ら老長を指するに似たり。今昔物語廿八十一
に「イヘノ長オホシナガまた「長受領」などあるは、全く其な
り。いせ物語に「むかしむ中わたらひしける人の子
ども、ゐのものとに出てあそびけるを、おとなになり
にければ、男もをんなも耻かはしてありけれど」

○おとなし 空穂、藤原君 三十「さやうに、おと
なし、きすまひし給ふべきなん、おはしまさぬ」落窪

一之上「いとおとなくしう云居たり」

○おとひめ 龍宮、弟姫などいふ是也。兄姫と云

ことは、いとたまく弟に分つときのみ云るを、於
登といふは「おとむすめ」「おとよめ」など、常にあ
またいひ、又稱辭にも、弟棚機、弟橋、比賣などいへ
るは、季子は、父母に殊に愛まるゝものなる故に、
其より轉りて、必しも季子ならぬをも、賞愛まるゝ
意にて、なべて美女などを於登と云といへる、さ
る事ならん。後撰集夏「なでしこはいづれともなく
匂へどもおくれてさくはあはれなりけり」落窪一之
下「おと、おと子にて、わきてかなしうし給へば
云々」これら弟子を愛むよし也。

○おどろかし 後撰集雜一、女のは、「小山田
のおどろかし」にもござりしをいとひたぶるにげし
きみ哉」詞花集雜上、能因法師「ひたぶるに山田も
る身となりぬればわれのみ人をおどろかすかな」
○おどろきうま 落窪一之下「ひきよすれば、お
どろき馬のやうに手なふれ給ひそ云々」

○おどろの髪 藤原爲忠集「けふぞとてしづは
たをりし山がつも、おどろの髪にあふひかけたり」

○おに かくしづまを於通といふ事 玉勝間

十三云「鬼と云ものは、すなはち今世に女わらは
べなどもいふ於通にて、古き物語、中昔の書どもに

多く見えたるさまも、もはら同じこと也云々。和名

抄鬼神部に「人神曰鬼。四聲字苑曰。鬼人死タル
和名於通。或記云。於通者。隱音之訛也。鬼物隱而不

欲顯形。故俗呼曰隱也」といひ、又鬼魅部にも「鬼和
名於爾。或說云。於爾隱字音訛也。鬼物隱而不欲顯

形。故俗呼曰隱也」といへる、皆ひがごと也。まづ

淤邇に鬼字をかくは、鬼魅の意をとれる也。魅とは

怪物をいへばなり。又天神地祇人鬼とて、人の死た

る神をも鬼と云。されどその人鬼は、淤邇にはあら

す。然るにそのわきまへなく、人鬼のかたをも、と

もに淤邇とせるは、字によりて誤れるもの也。すべ

て字の同じきによりて、名を混へ誤れる、此たぐひ

昔より物しり人のつね也。又淤邇と云名を、隱字の

音也といへるも、いみじきひがごと也。形をかくす

をもて名とせんには、加久禮などこそはいひもせめ、

その隠字の音をとりてよばんことは、いとく物とほし。さる事あるべくもあらず。又陰物なるよしにて、陰字の音也と云説も、同じたぐひのひが事也。淤邇と云はもとよりのふるき名也』以上五
勝間云々。今按に、物語書に云る状より見るときは、さる事のやうにもあれど、彼和名抄の説もひたぶるの非とはいひがたし。そは淤邇と云言、もとよりの古語ならば、必ず古き書どもにも見ゆべきものなるに、万葉などにも見えず。其他の書にも凡て見えず。たまく齊明紀の一本に「宮中見レ鬼」また「於朝倉山上レ有レ鬼」と見えたるは、人鬼の事と聞えたるを、人鬼にあたる古語の無かりけるまゝに、漢籍に依て鬼とはかけりしにこそ。又中古書に、人を取り食ふがありしまに記せる事のあるも、人鬼の悪神に交化シテて、稀にさる事もありけらし。是皆幽冥の所爲なりければ、その程隠の字音を取て、淤邇といひそめしも知べからざる事なりかし。伊勢物語下に「宮ばらにこともなき女ともあまたあり云々。此宮にあつまりきてありければ、をとこ「むぐらおひてあれたる宿のうれたきはかりにも於邇のすだくなりけり」拾遺

集雜下に「みちのくに名とりの郡くろ塚といふ所に重之がいもうとあまたありときて、いひつかはしける、兼盛「みちのくのあだちが原のくろ塚におにこもれりときくはまことか」大和物語五十七段、又重之集等可考合基俊集上「たゞひとり門のほかにはたてれども於邇こもりたる車なりけり」是ら女を指て於邇といへるのみにはあらず。隠れたるを於邇とは云と聞ゆ。伊勢物語も女どもの、一間へ隠れたる時によめる也。拾遺集なるも、隠妻になしおきけるをいふなるべし。基俊集なるも、車の中に女の隠れたるをよみたり。今世の童の遊びにかくれんぼうといふことあるを、其を又於邇事とも云る、是も古きわざなる事、次のおにごとの段を見て知るべし。

○おにあざみ 新撰字鏡云「薺葵也。醜也。
於カニア佐美」

○おにおどし 道の幸、卷下云「十二廿三日、菊川に出来れば、家ごとに長き竿にいかきつけて、しきみさしたるを、庇の柱にゆひそへて立たり。何ぞとへば、けふはせちぶでござりますから、鬼おどしをたてますと云。中身こよひは藤枝にやどる云々」

とあり。此わざ今も東海道筋にのこりたる歟。可尋之。彼おこと條に云し、十二月八日籠を捧るわざも、今此鬼おどしによらば、本はしきみひひら木などさしけんにや。

○おにがしま 保元物語に、嶋渡段二「爲朝島ノ名ヲ問玉へバ、鬼ヶ島ト申ス云云。島ノ名ヲ改ム

トテ、太キ葦多ク生タレバ、葦鳴トゾ名附タル、是琉球也。隋書ニハ派求ト書、宋史依之、元史瑠求ニ作。明洪武中琉球ニ改。皇國ニハ文治建久ノ後マデ鬼界或ハ鬼ヶ島ト記シテ、琉球ト唱ヘタルト見ニズ」

因唱
鬼外福内四字^{アカヒテハシメル}。蓋此方驅懲之様也。糺河原勸進申樂記寛正五年記云「これは蓬萊の島より出たる鬼でござる。今夜日本には節分じやと申て、家々に豆をはやす。いそぎ日本へわたり豆を拾うてかまうと存候中暑女、やあよい時分でござる。豆をはやしませう。福はうち／＼鬼はそと／＼」

○おに火

「かど火」を見よ。

○おにひとくち 鬼一口也。本行經「未來死鬼。
却奪人命。一入鬼口。悉皆食盡也。」

○おにも見る

源氏、夕霧^{タマグロ}、鷹の詞「いづこ

とておはしつるぞ。まろははやうしにきとのたまへ
ば、おなじくはなりはてなんとてとの給ふ」又云「夕霧
「かぐこゝろをさなげに、はらだちなし給へればに
や、めなれて今はおそろしくもあらず成にたる。か
うぐしき氣をそへばやと、たはぶれごといひなし
よりの態なり。日次記四十四、久安六年四月十一日

條曰「丁巳渡御方有掩目執人之遊。鶴賞人名執
上。上咲曰鶴放此遊已爲第一。深更退出云云」

未詳

スダニ

○鬼はそと福はうち
臥雲日件錄曰「文安四年十二月廿二日。明日立春故及昏景。宜毎室散燉豆。」

○おのれ 「おれ」を見よ。
○おはぎ ばたもち 尾花色の強飯 尾花の粥
中原康富記「文安五年八月一日云云。又今日尾花之粥事其由來何事哉。自然見及歟之由。令問之給云

云「此尾花之粥は尾花色粥のよし也。」茱花物語に「尾花色のことは飯」といへり。是に合せておはぎといふも、萩の花に見立てる也。又ばたもちと云も、牡丹のふくよかに饒はしげなるになすらへたるなるべし。

○おばや

「おちや」を見よ。

○おひかせ 仲哀紀に「大風順吹」土佐日記に「ぬさの、おひ風やますふかなん」宣長云「負風の義なるべし。追風にはあらじ」今按に、土佐日記の文にては、追風の意と聞ゆ。夫木十九雜、知家「しばしともいふかひぞなきおきかけて追手の風にいづる舟入」

○おひこめ 整居也。茱花、見はてぬ夢「有國を、つかさ位もとらせ給ひて、おひこめさせたまひてしを」

○おびたじしき 堀河百首、隆源「おどろかす人はあらじなあかつきのあられの音の、おびたじしさに」夫木卅六、爲家「夕だちのみねのむら雲たちさわぎ、おびたじしくもぬるゝ袖かな」沙石集一「東大寺の石ひじり云々。人信せぬまゝにおびたじしく誓

状するを云々」後漢書四十九に、夥字を訓り。
○おひとめがたき 夫木二春、光俊「濱なとるあらいそそのせのしきなみにおひとめがたき春のわか草」

○おひなる 「およる」を見よ。

○おひやかす 「おひゆる」を見よ。

○おひやる 枕草子「にくきもの、いそぐ事あるをりに、長ことをするまらうど、あなづらはしき人ならば、後などいひても、おひやりつべけれど、さすがに心はづかしき人、いとにくし」猶「たはごと」を参照せよ。

○おびゆる おびやかす

万葉二三十四丁に「諸人之協流麻低爾」字鏡下「憎抑於比也濱」また「愕然於比由又於止呂久」などあり。

○おびゆるき しどけなきさま也。落窓一之上

帶ゆるらかにかけてまるる云々

○おふく 「おたふく」を見よ。

正月九日。今曉室町殿姫君誕生也。御袋大館兵庫頭妹也」とあれば、やゝ古き稱也。後宮名目云「母だ

つ人をふくろになぞらへ侍る事は、胎中に其子こもれる時、袋の中の物の有如くにて侍れば、めでたき事にことぶきて申侍るなり」垂加艸二十再遊紀行云「俗稱シ三人母、曰ト袋。蓋取ニ諸胞胎之義也」といへり。誰も大かたかくのみおもふやうなれど、然るべからず。夜の御伽と云冊子に、老婆の姫君に申す詞に「云云、かやうに家の御袋とならん人は、物のしめく、りをよくし侍る故に、家の内人御袋さまとは申し侍る也」とある、此意なべし。昔は萬の物を袋に納けるゆゑ、何の袋、くれの袋と云名多くて、食物をだに餌袋といひて、それに入て持ありくほどなりければ、母たる人の家の財を預りて出入をするを、時代の詞して稱し習ひし也。負博奕と云ものに「今はかり盡しもらひ盡して、お袋の内も空しくなりにけり」と見ゆ。是らの詞をおもふべし。(猶「ふくろもち」を參照せよ。)

○おふしの夢見たやうじや 洞山初錄云「問不レ犯ニ一切ニ請師提綱。師云。睡子得レ夢」無門關云「打成一片。如ミ睡子得ニ一夢。只許ニ自知」

○おほ某 「おみ某」を見よ。

○おほかぶし 「かぶし」を見よ。
○おほきど 木戸は漏所の義也。今大木戸と云所これかれあるは、もと柵など結て、漏所を附たるより、名となれる也。江戸にも高縄に大木戸といふ名あり。此名いと古き時よりいふこと也。崇神紀に「大彦命到於和珥坂上」時。有少女。歌之曰。於朋舊妬庸利、うかうひてころさんと、すらくをしらに、ひめなそびすも」猶此名義の事、鐘の響にいひつれば省きつ。

○おほぐしをつらぐしにさす 大和物語云「さてかいまめばわれにはよくて見えしかど、いとあやしきさまなるきぬをきて、おほぐしをつらぐしにさしあけてぞり、てづからいひもりをりけり」

○おほごゑ 土佐日記、正月七日「ゆくさきにたつ白波のこゑよりもおくれてなかんわれやまさらん」とぞよめるいとおほ聲なるべし。」

○おほさかづき 古事記、若櫻宮段云「今日與ニ大臣飲同盞酒。共飲之時。隱面大鏡盛ニ其進酒。於是王子先飲。隼人後飲云云」

○おばたて 產立也。誕生のとき外戚方、又親

属より米を贈るを、東國にておばたてと云は、うぶたてを訛れるなるべし。此一名を鳥の子と云ことあり。年中記天文六年九月、「御うぶたての事」○○御はた物をかたと同じく入て、上に鳥の子をにぎりて、三日には三、五日には五、七日には七置なり。折のせは口一尺二寸、足は三あし、かんの高さ四寸、口傳有」

○おほつうま 新撰六帖一、知家「闘こえてくるればかへる大津馬のおのが一つれみちいそぐなり」

○おほつドミ 桜花物語とりの「がくの聲、おほつドみのおと、げに六種に大地もうごきぬべし」

○おほつぶね 「つぶね」を見よ。

○おほて、「て」を見よ。

○おほととのごもる 「およる」を見よ。

○おほぬす人 竹取物語「かぐやひめてふおほぬす人のやつが、人をころさんとするなりけり」

○おほはし 大橋也。万葉九十九「狹丹塗乃大橋」また「大橋乃頭に家あらば云々」

○おほみだう 大御堂也。中務内侍日記に「大

御堂のひろびさしに」源親行關東紀行云、「大御堂と

きこゆるは」

○おばめく 拾遺戀一、よみ人しらず「いかでかとおもふ心のあるときは、おばめくさへぞうれしかりける」後撰、夏、詞略、伊勢「はと、さすはつかなる音をきく、そめてあらぬもそれとおばめかれつゝ」和泉式部集に「おばめくなれともなくてよひくにゆめに見えけんわれぞその人」源氏、横笛に「いましも事のついでにおもひ出たるやうに、おばめかしうもてなして」

○おほゆき 万葉二十二「吾里爾、大雪落有」又四十「大雪乃亂而來禮」十九四十「米都良之久布禮留、大雪」

○おまへ 御前と云は常なれども、人にむかひておまへといふ詞の例を出す也。濱松中納言物語一河陽縣后の御子の、三の御子にむかひてのたまふ詞に「おまへへのいとようものおぼししか、おとなしくおはしますに」うたゝねの記に「是や桂のさと人ならんと見ゆるに、たゞあよみにあよみよりて、これは何人ぞ、あな心う、おまへは人の手を逃出たまふか云々」

○おまる まり桶 大小便を取器をおまると云は、大便をまるる物故に名となれる也。古事記上に「屎麻理散」万葉十六六十八に「屎遠麻禮」竹取に「燕のまりおける舊糞」などあり。宇治拾遺にまりをけといへる、大便を溜たる桶の事也。(猶「よつぱり」を参照せよ)

○おまんま 今の俗に飯をおまんまと云は、御美味々々々の約れること歟。そは本兒を養ふ母、又は乳母などの、其兒にいひし詞なりけむを、つひになべての女の詞となりしなるべし。餅をあんもと云も、甘餅の意、乳母を於毛と云も、乳汁の甘きより云と聞ゆ。されば阿母ともいひし也。

○おみ某 おほ某 おん某 貴人の品をおみ帶、おみ枕などいひ、食物にもおみおつけなど云は、大御某と古言の遺れる也。大御神、大御言など申すは更なり。万葉二、柿本人麻呂歌に「大御身爾大刀取帶之。大御手爾弓取持之」などの類也。さて常に此大御二字の内、御を省きて大某といひ、又大を省きて御某と云やうになれる、それも古くは添て猶おほみとよめり。さればやゝ後になりても、大神

と書て、おほんかみと唱へ、物語書などに御一字をおほんと訓るなども、本の大御を音便におほんとは云る也。されば世俗におみ某と云こそ、却て古言の遺れるなれ。重言とおもふはなかくにひが事也。

○おむづかる 落窪一之下「あなしけんしの世やと打むづかりてゆく云々」又「うちむづがりてゆくうしろでを云々」

○おめくすな 「める」を見よ。

○おもがくじ 万代集冬、定頼「もみぢばのちりつむときぞうちはへてはらはぬ庭のおもかくしなる」

○おもぎらひ 新撰六帖、二、知家「世中はいわけなき子の、おもぎらひ見しがなきにはねこそなかるれ」

○おもし 老人などを家のおもしにもなるといふおもし也。源氏、若菜下に「世のおもしとなり給ふべき云々」

○おもしろき 齋明紀に「於母之櫻枳今城の内は」万葉一七「何怜國曾」また四五十七四十九十六二十等に出。古語拾遺に云る本義の釋は、

うべなひがたし。

○おもてく 今面々と云意也。清慎公集「かき

わけてわれをなさしそうつくしきおもてくにかつ
はいひつゝ」頼實集「おいせじとおもてくにのら
へども霜いたゞけるしら菊の花」六帖、袖「そまや
まにたつ杉くれの、おもてく人にひかる、君はたの
まじ」

○おもてぶせ 後撰集春下、躬恒「かさせども
老もかくれぬ此はるぞ花の、おもてを、ふせつべらな
る」空穂、俊蔭下「おやの御、おもてぶせにわが身は
いといみじくならん事と、なげき侍りしかば」落
窪一之下「子どものおもてぶせにて、おといのい
みじう腹立給ふ云々」

○おもてよわき 女郎花物語に「おもてよわき
人にて云々」とあるは、俗に遠慮深いにて、おもふ
事をえいはざる意也。古事記上に、宇受賣命の御事
を「面勝神」とあるうらにもかよひ、又厚顔、強顔の
反対にて、これを漢籍に「弱顔」といへる事あり。通
鑑、陳宣帝紀五「弱顔不能諱。以實告之。」○注胡
三省曰「見三人輒自羞。而顔有三丑者。爲三弱顔。今人

猶有是言。」

○おもに におちき 古今集、誹諧「人こふ

ることをおも荷とになひもてあふごなきこそわびし
かりけれ」頼政集「日をへつゝそふるつらさをおも
荷にてもだえはつべきこちこそせぬ」万葉五三十
七子「重馬荷爾表荷打等云々」續紀九十六に「美麻斯親王乃
齡乃弱爾荷重波不堪自加止云々」猶此詞十四六丁、十一

十丁、二十二丁等にも見ゆこは今小兒の痘瘡をやむに、
荷が重いと云心ばへによく似たり。

○おもに、こづけ 佛の顔も三度

八十の二子

後撰集二十賀、御製「としのかすつまんとぞするお
も荷にはいと、小附をどりもそへなん」万葉五三十
七子「重馬荷爾表荷打等云々」と見ゆ。嗚呼矣草と云物に
云、おも荷に小附と云諺は、地藏經及義楚六帖に出

たり。佛の貌も三度と云も據あり。孔子も二度せば
可也といへり。八十の三子と云は、漢書文帝の記に
「八十翁女小兒」と有より云る歟。又自然と似たるに
もあるべし。

○おもはぬ某 源氏、夢浮橋「法の師と尋ねる
道をして、おもはぬ山にふみまよふかな」小侍

従集「おもはぬ」と千載、難中に「おもはぬ磯の」玉葉集に「おもはぬ旅」などあり。今もよくいふ言なり。

○おもひ得る事は人によらず 細川玄旨法印云

「古人さへしらぬ事を、今の世に辨たりと申は、舌のぬかれん事ながら、唐の儒書の新注を見るに、古注にまされる義あり。今古にもよらず、深く執心して工夫をなし、不審をはらさむと思へば、愚かなる身なれども、天のあはれみにや、ふとよき説を見出するものなり。さありとて、古人にまさりたる智恵にはあらず。只今辨知する事も、先古人のあらごなしをして置れしうへに付て出来る義なり。古賢の恩徳にあらずといふ事なし云々」としるし給へること、まことにさる事なりけれ。又安永年間の無名隨筆云「物の考へは、人にはよらず。いまだ學問のまだしき人も、稀々には、いと思ひの外によき考へする事あり。然るに其まだしき事の多かるを見て、なでふ事なきものに見くだし、いひおとす人の多かるは、無念の事也。十にして二三策も取事あらば、よろしき書とすべきもの也。又世にさせる考へもせず、誰

もうけ引べきすぢを、さら／＼とかきたるを、大かたの人難なくて、よき書の如くいひ思へど、さやうならん書こそ、却て無やくなりけれ。たとひ謬ありひが事はまじりたらんとも、一ふしありぬべき事を、憚らすいひ出たらん、よしや十に一つなりとも、めでつべきものにぞある。たゞ／＼未定のふしを考へんとするこそ、學者のつとめなれ。そのかうがへは、當るもかうがへ、はづる、も考へ也。まことはもしも當るかとて、試を云程のあはひが考へなりければ、かうがへのたがふに憚らすして、敢ていひ試んこそ、あらまほしきわざなりけれ云々」といへり。是又もの學びせん人の、よき心得なるべくこそ。

○おもひざし 盃に云。太平記十、高時自害條

に「高重云云。舍弟ノ新左衛門ニ酌ヲ取セ、三度傾テ、攝津刑部大夫入道道準ガ前ニオキ、思指マウスグ、是ヲ看ニシ給ヘトテ云云」同廿九、松岡城周章條に「厩侍ニハ赤松信濃守範資、上座シテ云云。イザヤ最後ノ酒盛シテ、自害ノ思ザシセントテ云云」義經記七、平泉寺見物の條に「くまゐやかたをかおもひざせん」

○おもひじに 思死也。大和物語に「是を、おもひじに、かたはらにふせりてしにけり」

○おもひなし 金葉集秋、源親房「さやけさ

はおもひなしかと月かけをこよひもしらぬ人にとは
レや」月詣集十月、覺綱法師「神な月おもひなしに
やすみよしの松ふくかせもけさはさびしき」堀川百

首、權中納言匡房「朝まだき秋の初風たちぬれば思
ひなしにぞすゝしかりける」

源氏、かげろふ「かたへはおもひなしかをりからと
おばして」うた、ね「おもひなしにや、こゝもかし
こもあれまさりたるこゝちして」

○おもひます 落窓一之上「御とのぬものも

薄きを思ひまほして云々」

竹窓隨筆云「夜夢中

○おもふ事はゆめに見る 竹窓隨筆云「夜夢中

多見生事。罕^レ夢^レ於死。何也。蓋^レ夢以^レ想成。想多

見^レ生。不^レ及^レ前生^レ故也。草木子云「該曰。南人

不^レ夢^レ馳。北人不^レ夢^レ象。缺^レ於所^レ不^レ見也」

○おもふさま 好忠集、暮の春、三月のはじ
め「色みむとうゑしもしく山吹のおもふさまにも
咲る花かな」

○おもや 母屋なり。竹取に「おもやのうちに

は、女どもばんにいれてまもらす」とあり。今俗に
本家の事をおもやと云、其ことわりたがへるにあら
す。よく古意に通じたり。却て今學者のおもふ所に
達へる事多し。其よしは雅言部のもやの條に委くい
へり。

○おもゆ

産のすさみに云『今病者などの物食
はぬを、おもゆもゆかぬと云は、水も通らぬと云が

如し。古ヘに水をもひといへり。神武紀に「主水」又
催馬樂^{飛鳥}井に「みもひもさむし」といひ、赤染集に「ひ
ややかなるおもひ汲に」ともいへり。今もおもゆと

云はヒ、ニ通轉也。契沖云「モとは煮水也。唯可^レ云
用^レ飲食^レ水^レ不可^レ指^レ河池水^レ言^レ毛比^レ當^レ辨別^レ云
云」今按に、御鎮座本紀「御水」とあり』^{すさみ}已上窓のと云

り。此說一わたりはさる事のやうなれど、今おも
ゆと云物を見るに、全くの湯のみにはあらず。飯を
よく煮解て、湯がちなるをいへり。然れば飯湯のよ
し也。其よしは御飯の條と見合せて知べし。又右の
中に、契沖の説とて引るよろしからず。水をもひと
云ことは、水の器盤より轉りたる名也。煮水は仁^レ於

毛比とこそよみたれ。

○おもる おもくなるを「おも」といふ。六百番

歌合、定家卿「風つらさもとあらの小萩袖みて更

行空におもるしら露」

○おやく 親々也。夫木廿七、大納言爲兼「あ

また見ゆるをちかた野べの牛の子の「おやくしりて

つれぞわかる」(猶「たはごとを」参照せよ)。

○おやこ 親子也。紀貫之集「おなじ色の松と

竹とはたらちねの「おやこ久しきためしなりけり」

○おや子の中 寛平菊合「のむからにおや子の

中もわすれずときく谷水をひにてながせり」

○親玉 「こぢよく」を見よ。

○おやぢ 子より父を指て「おやぢといふは、直

に父を崇いふ也。かゝる知は志保都遅、麻呂賀遅など云類の遅にて、古くよりの崇言也。上の段の父、

祖父などの遅も皆同じ。又甚賤者の言に、妻より夫

を指て「おやぢ」と稱を、古事記傳十一世ニ丁には、「古く

其夫を日子遅と稱もと同じとあれど、然らず。こはその產たる子の親父なるよしにて、子の方につきて云詞也。そは其妻の吾が父母をも、子を持て後は「お

ちゞさま」「おばゞまと」稱に准へてもしるし。これは其產れたる孫の稱す詞につきての稱なり。さればいかに卑き者なりとも、子を持て後ならでは、夫を

指て「おやぢ」とは稱ざるをかし。

○おやづる 「たはごと」を見よ。

○おやにまさる 新撰六帖三、光俊「あしね

はふうきねにすぐ鴨の子の「おやにまさるときくは

たのもし」

○おやのあとふむ 夫木八夏、大納言經信卿

「うぐひすのねぐらの竹をしめおきて「おやのあとふ

むほと、きすかな」

○おやのおや 拾遺雜下「おやの「おやおもはま

しかばとひてましわがこの子にはあらぬなるべし」

後拾遺賀、藤原保昌朝臣「かたくの「おやの「おやど

ちいはふなり此子の千世をおもひこそやれ」中務内侍日記「宮内のおもとに、おやの「おやともいひぬべ

き人の云々」

○おやめく 藤原清正集「女房のしりたるにも

のいひけるほどに、おやめきたりける人の聞つけて

ゐて入にける朝に」

○およぐ 新撰字鏡に「泝懇宇加夫又於與支」

游泳等の字をも訓り。平治物語、盛衰記等におよぎ
つくとも、およぎわたりぬとも見ゆ。及ぶと同語歟。

俚言におよがくと云を思へば、及搔の義なるべし。

○およる おひなる おほとのどもる 中

務内侍日記に「御よるの後も、とみにねられず云々」

又「およるの後云々」又「こよひおよるも云々」又

「あかつきちかくおよるなれど云々」又「おひなるよ

りさきにと、いそざまよりたれば云々」増鏡日かけに

「みかどはいづくにおよるぞとふ。夜のおとゞに

といらふれば云々」著聞集五に「月をも御らんせで

およるなれば云々」などあり。今も女の詞に寢給ふ

事をおよるといひ、起給ふ事をおひなるといふ。此

おひなるに對へておもへば、およるは御夜成の略き、

おひなるは御日成の略語なるべし。又此およる成を

大殿ごもるといふも、夜のおとゞに隠りて寢給ふを

云。古くは此隠り寢る所をくまといへり。万葉集中に

見ゆ。古事記上「久美度」とあるも同じ。

○おりのぼり 「くだまく」を見よ。

降昇也。竹取に「此國の海山よ、

り龍はおりのぼるものなり」公忠朝臣集「おりのぼり見るかひもなししら雲の山とたのみし君もなければ」

○おれ おのれ いが 今俗言にては、

自己ことをおれと云を、古くは他を貶めておれと云

り。古事記、倭建命段に「意禮熊曾建二人。不伏無

禮聞看而取殺意禮詔而遣」清少納言記十

「時鳥をいとなめくうたふ聲ぞ、心うき時鳥よ、お

のれかやつよ、おれなきてぞ、我は田にたつとうた

ふに、さゝもはてす」金槐集下「二所下向の後、朝

に侍ども見えざりしかばよめる「旅を行し跡のやど

もりおれ／＼にわたくしあれやけさはまたこね」な

どあり。又古事記、神武段に「大久米命二人召ニ兄宇

迦斯馬豈云。伊賀所作仕奉於大殿内者。意禮先

入明白其將爲仕奉之狀上而卽握横刀之手。上

矛由氣矢刺而追入之時云云」傳釋云「伊賀は阿賀と

通へり。さて於乃禮とは自己を云稱なるに、又人を

賤しめて云にも用ひ(今世にも然り。字治拾遺に「此

度の我命にかはれおのれらよ」などあり)意禮と

は人を賤しめて云稱なるを、今世には自己の事を然

云。此等の例を以て見れば阿賀と云も自己の事なる。を人を賤しめて云にも用ひしにや。是又今世にも然り。書紀に此を虜爾と書れたるも、其意にや。皇極紀十一に「蘇我大臣蝦夷云云。嗔罵曰。噫入鹿云云。爾之身命不亦殆乎」とあり。此伊賀の言、伊部のいしの條、又人の名下に附て云伊などをも合せ考ふべし。

○おろす 人をいひ貶すを「おろす」と云ことあり。源氏、少女に「あさましくとがめ出て、おろす」又同卷に「こゝにて又おろしの、じるものどもあり」又空蝉に「おろしてんやは云々」

○おん某 「おみ某」を見よ。

○おんかた 御方也。源氏、松風、あかしのかたを、地の詞よりして御方といへり。

○おんき 「おんこと」を見よ。

○おんこと みこと 御事也。續

後撰十八難下に「藻壁門院御事、その後かしらおろし侍りけるを、人のとぶらひて侍りけるかへりごとに云々」とあり。是今世に貴様御事、御息女御事など云御事におなじ。此言のかく古くより見ゆるをお

もふに、天皇命、神命など申す尊稱の、美許登と云言も、本は御事にて、今おん事と云と同語なりけん。そは万葉などには、必ずいたく貴む計にもあらず、父命、母命、妻命、妹命と、おほくいへる、つひにその意と聞ゆれば也。さて其美許登に命字を書ならひきつるは、君の御言を重みする方よりあて、尊稱となりしならん。君の仰の無止事より轉りてやむごとなしと云言の、貴む言となり來したぐひなり。又其文字に就て、至貴曰尊。自餘曰命など分ちたるは、偏に字の上のさたにて、言の意はよそになりける也。又今俗に彼御事といふ所を、貴様御儀とも云、儀字は容儀、光儀などの儀よりうつりつるならん。

○おんことしげ 繼後撰集四夏、前太政大臣「露むすぶまがさに深き夏ぐさの何ともなしにことしげの身や」

○おんびん 穩便也。五色石七尚式「彼他瞧見畢。不當穩便」 論語に「或曰。以德報怨。何如。子曰。何以報德。以直報怨。以德報怨。德云云」

佛說云「報怨以德爲善。以恩報怨今永亡。自他安穩。」